

## 高温登熟性に優れる「高育85号」の育成

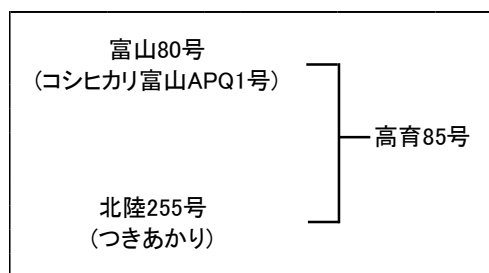


図1 「高育85号」の系譜



図2 「コシヒカリ」(左)と「高育85号」(右)の玄米写真

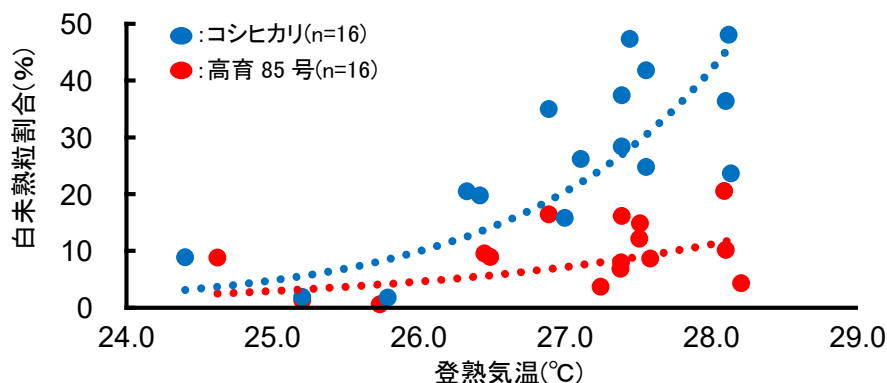


図3 「高育85号」における登熟気温と白未熟粒割合の関係

注) 2019年から2025年までに得たデータを使用。試験場所は安芸市、南国市、高知市、土佐市、須崎市、四万十市である。登熟気温は出穂期から20日間の平均気温。農技センターのサンプルにおける登熟気温はアメダス後免から、その他のサンプルにおける登熟気温は農研機構のメッシュ農業気象データから得た。

表 高育85号の特性

品種 系統名	出穂期 (月/日)	成熟期 (月/日)	稈長 (cm)	精玄 米重 (kg/10a)	同左 対照比 (%)	精玄米 千粒重 (g)	整粒 割合 (%)	白未熟 粒割合 (%)	玄米 タンパク質 含有率 (%)	食味 (-3~+3)	いもち病 真性抵抗性 遺伝子
高育85号	7/4	8/9	72	589	107	23.0	80.6	1.9	6.92	-0.3	<i>Pii, Pik</i>
(対照)コシヒカリ	7/1	8/5	85	543	100	22.3	70.5	7.5	7.23	0	+

注) 「コシヒカリ」に比べて、優れる形質を橙色塗りで示した。食味は「コシヒカリ」と比べて、かなり不良を-3、不良を-2、少し不良を-1、同じを0、少し良いを+1、良いを+2、かなり良いが+3はいもち病真性抵抗性遺伝子は保有が推定されるものを示し、+は該当遺伝子がないことを示す。2019~2024年における6カ年平均データを示した。

近年、地球温暖化により水稻の栽培期間の気温は上昇しており、「コシヒカリ」では穂が出た後の気温(以下、登熟気温)が高いと発生する白未熟粒が増加し、等級低下の要因となっています。

そこで、登熟気温が高い条件下でも白未熟粒の発生を抑制する遺伝子(*Apq1*)を「富山80号」から導入した「高育85号」を新たに育成しました(図1、2)。

「高育85号」は、「コシヒカリ」と比べて、登熟気温が高い条件下でも白未熟粒の発生割合が低いことが確認されています(図3)。また、「コシヒカリ」に比べて、4

日ほど成熟期が遅いですが、収量が多く、いもち病真性抵抗性遺伝子*Pii*、*Pik*を持つことが推定され、いもち病に罹病しにくいという優れた栽培特性も備えています(表)。

「高育85号」は令和7年度から農技センターで生産力本試験を実施するとともに、県内各地での現地試験で適応性も評価中です。

今後は、栽培試験や温度条件と白未熟発生割合との関係解析を行い、現場導入における効果等を評価し、普及を目指していきます。

(水田作物担当 武田俊也 088-863-4916)